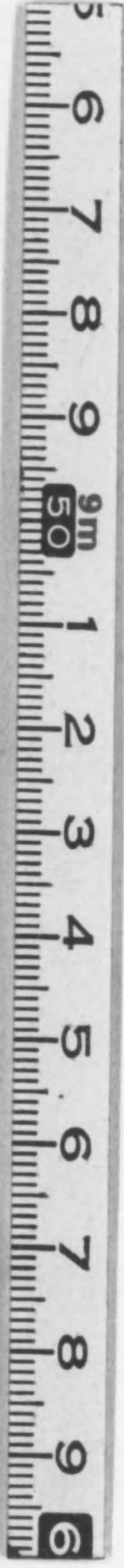


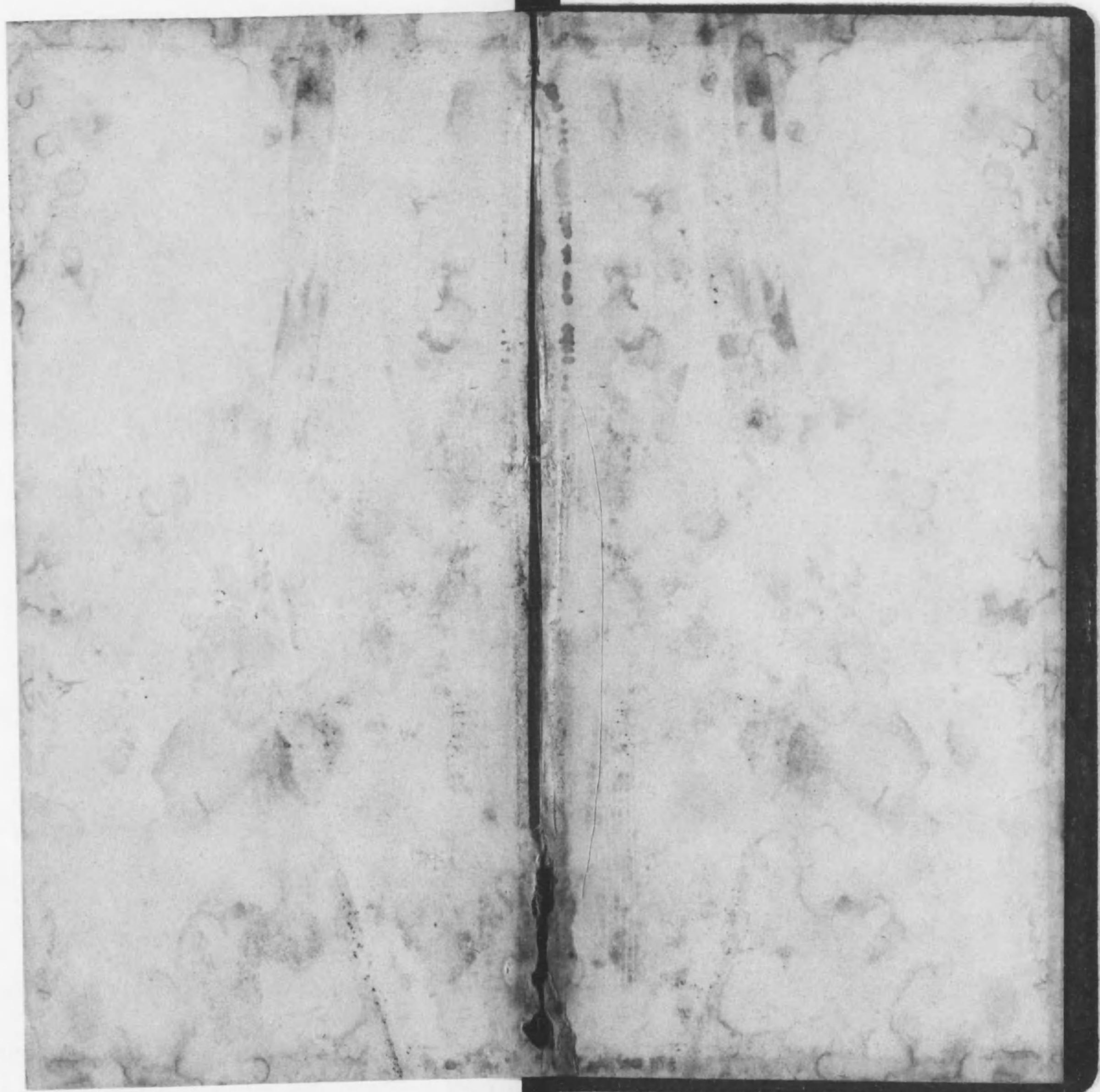
特277  
614

特277-614  
\*76W10553 \*



始









阿 吽

阿

經

富長俊次郎



# 阿吽阿經目次

阿吽阿第一に就いて	三頁
阿吽阿	一頁
阿吽阿第一	三頁
禮讚謝第二	六頁
祈禱第三	八頁
皇室祖國第四	一〇頁
祖先考妣第五	一一頁
子孫第六	一二頁
體認第七	一三頁
遺囑第八	二三頁

76W10553



感謝生活(始中終記)……………四一頁

子孫に告ぐ……………四七頁

講演筆記……………五五頁

阿吽阿教行者……………一九頁

阿吽阿教行者……………二二三頁

阿吽阿教行者に就いて……………一四五頁

同行者心得……………一五九頁

誤れる學說の流毒を歎く……………一六七頁

阿吽阿教會……………一七七頁

阿吽阿教行者篇追加……………一八三頁

阿吽阿經目次終

# 南無阿吽阿

阿吽阿經目次終

### 阿吽阿第一に就いて

「阿吽阿第一」は、絶對靈格自覺の概要であるがゆゑに、言語文字に依つては、到底詳かに表章し得る限りではないのである。況んや之を簡単に説明することは、無論不可能である。然るにそれを強ひて試みるに於ては、幾多疑惑を招く虞があるのであるから、最も慎重に考慮すべきものと信するのである。

此の如く「阿吽阿第一」は、言語文字を以て説明することは、殆ど不可能に幾いのであるから、之を會得せんと欲する人は、其の説

明を他人に求めず、先づ自ら經典「體認第七」以下を、幾度も意義内容の納得出來るまで繰返し熟讀し、偏見を捨離し、慎で内省すれば、經文「阿吽阿第一」に表せられたるが如く根本智を自覺し得る筈である。

「阿吽阿第一」が、經典の卷頭に出てゐるがゆゑに、經典を攻究せんと志す人、先づ卷頭「阿吽阿第一」より順押しに始めても、忽ち難關に直面して、全體攻究の進歩を阻止することになるのである。之に反して前述の如く先づ「體認第七」以下を攻究して、其の體系

概念を略々體得した後に、歸納的に「阿吽阿第一」を觀れば、會得し易き筈である。

如上の理由により、改めて同行者一般に對する予の希望は、「阿吽阿經」禮讚謝第二以下經文の解釋に就いては、自由に檢討論究し、共同の利益のために所謂切磋琢磨して、進展向上の道を坦にすることは可なるも、「阿吽阿第一」に就いては、他人のためにすると、自己のためにするとを論ぜず、其の註釋論疏を一切遠慮し、經文を全然あるがまゝに保存し、行者各自は、自己内省に由つて之を會得せ



られたいといふことである。

予は豫て此の心得であつたので、一昨年講演せし時も「阿吽阿第一」に就いては、其の意義を述べることをさしひかへておいたのであるが、更に考へるに、大略ながらも其の意義を述べて、「阿吽阿第一」を見る人の乗<sup>しやう</sup>として残し置くのが、寧ろ大なる誤解の豫防として得策であらうと思はれ、本日茲に「阿吽阿第一」特に阿吽阿教の據つて立つ基礎であり、教理の樞軸を成す「智」五項中の「第四項智」及び「第五項智」に就いて簡単に演べる次第である。之が「阿吽阿

第一」に就いての予の最初の講演であるが、又今後は一般同行者と共に、それに就いての言説を遠慮する考であるから、恐くはこれが最後であらう。

本来言語文字の企て及ぶべからざることを敢て試みるのであるから、冀はくば聞く人、言語の末に拘泥することなきやう、豫め注意を促して置く次第である。

「智 御自愛御自處の妙動」阿吽阿の御自愛御自處こそ寔に阿吽阿の無始無終・無邊無涯に彌<sup>わた</sup>る御存在<sup>ごそんざい</sup>の全意義である。此の全意義と

申すことは、無始無終・無邊無涯に彌る唯一者は、御自愛御自處の  
みで、其の他には何も無いと申すことである。御自愛御自處は、  
意志的に觀た御存在であつて、その外に顯はれた動的御存在が妙  
動どう即全一活動ぜんいつくわつどうである下に詳かなり而して全一活動は、其の活動機關として全  
一自己同一が、部分的無臭無色智性生成性の原理として、自己の内に連鎖活  
動どう自律自助、交互扶持の原理の原理することによつて行はれるのである。此の機關の機構を  
了解に便宜のため、各自が假りに心裡に於て、全一阿吽阿の該總し  
給ふ萬境と、部分的智性が、部分として當然稟有ひんいうする萬境と、各々

同極異極、或は牽引し、或は反撥する相關關係に類する運動を想像  
し、或は時計細工の如き大小齒車仕掛に類する運動を想像するもよ  
ろしからうが、全機關の動く原動力的意志は、御自愛御自處、即全  
一活動本性阿吽阿の以下略す即統一原理一三二頁二行即一切知識の原型自三六頁四行、五三三頁五行即人道一般の原理自一六頁一行至二一頁四行、一三三頁三行乃至五行であつて、之に因つ  
て部分的智性の連鎖活動が行はれるのである。但しこの妙動は、何  
所迄も阿吽阿の御内證であつて、後に述べるであらう永久幸福の妙  
境と同様に、部分的現象界個性の固より認識し得る限りにあらず。

従つて言語文字の及ぶところにあらず、唯明らかなる智性のみ能く之を直観し得るのであるから、妙の一語に盡きるのである。必ず言の末に拘はることなかれ。

御活動おんくわつどうが御自愛おんじあい御自處おんじじよを充實するのであつて、御自愛御自處と妙

動とは、異稱同義である、即無窮に彌る唯一御存在である三頁 二行我等

の日々禮拜し奉る阿吽阿である一、三頁 二、三行現象界萬有の實相である自一、二、七頁 五

行五、一、二 八頁 三行無始無終・無邊無涯に彌る阿吽阿の本體である三頁 二、四、七行現象界萬

有の終に歸還すべき言語に絶したる幸福の妙境である自四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇

連鎖活動する無臭無色の智性、其の連鎖活動中、其の或ものが或一

は一以上数の多寡に拘らず自己稟有の狭義自由に委せて三、一頁 七、八行偶々たまたま萬境ばんきやう該總がいそう阿吽阿あうんあの

或境に偏倚個性の偏見 我執の本原することあり。滯とどふること久しくして、其の境

自己具有の相應境に響應し、それが旺盛發達して、其の境遇現象化

したのが現象界萬有個性の始である四三頁 二、三行、七〇頁 六、七、八行、一二九頁 二乃至四行但し連鎖活動

する智性は、必ずしも悉皆現象界に墮すものと観るべきではないの

である。寧ろ其の大部分は、無始の始よりこのかた、今もなほ無臭

無色にして、言語に絶する阿吽阿の妙境にあつて、活動享樂してゐ

るものと信ずるのである。

此の如く或境に偏倚して、始あり、終ある現象界に墮したる智性は、其の寄る所の境遇に特殊なる性・能即ち箇々欲・箇々機能を兼ねたる個性として假の姿を現はし、爾來箇々欲を趁うて輪廻流轉する有様は、「講演筆記」個性の中間期に見る所の如し。是れ經文「部分界一切萬有化成し、種々相現象し、種々境發展す」に應ず。

「因りて」の意義は、一切萬有化成し、種々相現象し、種々境發展する次第は、即ち御自愛の妙動に因りて起る向上發展なりと示され

たのである。御自愛御自處の妙動が、化成現象の直接原因なりとするのでは決してない。化成現象の直接原因は、前に述べし通り、智性が其の稟有する狭義の自由主命を帯びて他國に使用する者中途にて休憩する自由の類に委して或境に偏倚し、久しく偏境に滞りたる事實がそれである。

如上化成現象する直接原因と。その發展する動因は、御自愛御自處であるといふことを、明らかに區別して了解するにあらざれば、全體系の理解上疑惑を惹起する惧があるから、特に茲に讀者の注意を促して置く次第である。

連鎖活動中の智性、偶々偏境に寄りて現象化したりと雖も、其の實相は、無論全一活動本性一三三頁五、六行であるから、其の實相たる全一自己同一は、固より御自愛の外に漏れるべきにあらざれば、御自愛は常に自己同一體たる萬有の上に光被して、無臭無色連鎖活動の妙境へ進展・向上・引導し給ひて息むことなし。箇々欲を趁うて御引導一三九頁四行に背く場合は、必ず廣き意味での御愛・因果則によつて制節反正せしめ給ふ自四五頁六行至四六頁一行がゆるるに、現象界萬有は知らず識らず御自愛に感化し、向上・進展するのであるが自七七頁二行至七八頁二行斯の如き間に

個性は、いつとはなしに御引導に感じて之を御慈悲と崇め仰ぎ、只管依り怙たのむやうになるのである。未だ唯一御存在阿吽阿を悟らず、多くの場合に錯覺して迷信に陥るとは雖も、人智を超越する靈性に依頼する信仰心が、益々個性の進展・向上を促すのである。是れ經文「乃ち部分界萬有は、因果の御則おんのりに順したがひて化易くわえき・推移すゐいし、御慈悲と崇め奉る愛の御引導に隨ひて進展・向上する所の根本智妙動の連鎖なり」に應ず。

凡そ愛なるものは、幾多名目にて稱ととられるが、中に就きて自愛に

勝り、より切實なるものは他にあるべからず。されば普遍恒常切實なる全一御自愛は、自己同一智性たる萬有の實相に感應し、知らず識らず現象界個性は進展・向上し、遂に靈性を意識して御慈悲と崇め仰ぐに至るは、洵に當然の成行である。たゞ憾むらくはこの間にあつて、御慈悲の出る所を錯覺し、種々偽宗教迷信に陥ることであるが、それも御導きに依り、更に一段進展・向上して二九頁三乃至五行遂に偽を棄て、眞に就き自六八頁五行至六九頁三行自一四五頁三行至一四六頁四行豁然として阿吽阿の有難さ勿體なさを、染みなく感謝して七〇頁四、五行一向中和統齊ひたすらちやうけいの御道おんみち、御愛御引導おんあいおんごんどう

に順ひ奉り、偏見我執を捨離して中を守り、御因果則の制節反正の賜に依りて遂に正位を逸せず、自律自助・交互扶持亦圓滿和同して、最初一境に偏倚して無臭無色の妙境を逸せし智性、茲に到つて割符の合ふが如く、復た根本智阿吽阿に契合完全一三七頁四乃至七行して、永久幸福の妙境に安住するのである。是れ經文「故に萬有は、此の中和統齊の御道御愛と、御因果則の妙に因りて推移・進展・向上して、遂に根本智に契合完全す」に應ず。

「智 個性不二。部分界の箇々は、極微も其の構成も悉皆智性即ち

智、是を以て箇々は必然活動す」。全一自己同一が、部分的無臭無色  
 智性として自己の内に連鎖活動することは、前に述べし通りである。  
 故にこの連鎖活動するものは極微なると、極微によつて構成せられ  
 たる組織體なるとを論ぜず、必然に悉皆智性である。妙動が動的唯  
 一御存在前にありなる通りに、自己同一智性の動的存在は、連鎖活動で  
 ある。即ち個性交互扶持の原理である。乃ち智・個性不二の證明で  
 ある。

箇々とは、全一活動機關として全一自己同一が、部分的無臭無色

智性として連鎖活動する部分的箇々たる智性の意味にして、未だ一  
 境に偏倚して其の境の屬性を帯びるに至らざる所の純智性の一ツ一  
 ツのことである。

「箇々は、箇々に必要の箇々欲箇々機能を稟有す」とは、連鎖活動  
 する部分的なる智性、偶々萬境該總阿吽阿の或る境に偏倚し、滯ふ  
 ること久しくして其の境現象二、三頁したる後の一ツ一ツのことにし  
 て、其の一ツ一ツが現象同時に該境の屬性、欲と欲を充す機能を賦  
 けるといふのである。

「箇々欲・箇々機能を賦けたる箇々は、智性たると與と個性」とは、連鎖活動する箇々は、本來無臭無色の智性個性の實相であるが、前に述べし通り現象して欲・能を賦けたるにより、もはや純なる箇々智性に非ず、欲・能に蔽はれたる假の姿二、三、四、三行であるから、之を區別して個性と稱へるのである。

「箇々欲允よぐまことに中和を得て智性明らかなる個性は、即ち全一の部分的顯現」。前に述べし如く、一境に偏倚したるに由り、其の境現象すると與に、該境の屬性欲・能を賦けたる個性は、自己存續欲と、其の欲

を充たさんための能力を發揮するのは、境遇自體の持前であるから必然ではあるが、適度を踰ゆれば、交互扶持する智性の本性に戻りて偏見我執となるのである。個性は、其の進展程度の低ければ低きだけ、それだけ現境遇執着欲旺盛にして、御引導の感應が遅鈍である。然れども人界迄進展・向上したる個性は、一旦豁然として阿吽阿の無限愛に感激し、衷心阿吽阿に禮讚謝し、身は現象界に在りながら、箇々欲洵まことに適度を踰へず一、一、一、二、二、七、七、行智性内ちせいうちに明らかに、偏見我執を捨離して交互扶持圓滿和同するに於ては、是れ全一の部分的顯現



である。

自律自助・交互扶持は、中和統齊の御道である。故に阿吽阿教行

者は、阿吽阿の無限愛に則り、他を憎まず他を怨まず

自一四三頁四行至一四四頁一行、四五頁一行

乃至五行 或は諫め、或は教へ、或は導き、或は扶けて、どこまでも人道

を盡すのが中和の御道であり、阿吽阿教行者の本分である

四五頁一行 乃至五行

自律自助・交互扶持は、中和統齊の御道であるから、個性の常に  
實踐躬行して、決して窮することのあるべからざる正道である。此  
の道は屈從を善とするのでは無論ない、偏見を捨離して自律自助し、

交互扶持して、個人の間にも、國際間にも協和する道である。暴力  
に對してさへも或は諫止し、或は訓戒し、或は制止すべきは勿論で  
あるが、その餘裕なき場合に於ては、之に抵抗して自己を防衛する  
ことは正當である。尤も君父に對しては、如何なる場合に於ても、

唯忠孝あるのみである

五一頁四行 乃至八行

「智性は、根本智を自覺し、靈界に感應し、箇々機能と協作用して  
對象を認識す」。夫れ阿吽阿は、無始無終・無邊無涯智である。個性  
は、智性と箇々欲・能の合同である。此の無始無終・無邊無涯絶對

智を個性の立場にあつて認識せんとするは、假令ば算數に依つて無始の過去、無終の未來時間を計算せんとするが如く、尺度を以て無邊無涯空間の廣袤くわうはうを測量せんとするに似たり、安んぞ功を奏するこ  
とあらんや。

無始無終・無邊無涯絶對智は、唯だ御自愛御自處妙動精能、箇々欲の蔽ふところなき明らかなる智性のみ、之を感情的に直覺し得るのである。是れ經文の「智性は、根本智を自覺し、靈界に感應し」に應ず。

之に反して對象認識は、現象界の萬有が、其の相對關係に於て互に認識することである。則ち認識は、認識者が被認識者の有する差別的特質屬性を認識するのであるから、御自愛御自處絶對精能、智性のみにては、對象の差別的特質屬性を判斷する法式が缺けてゐるので、差別界心身の機能と協作用して後に判斷形式が調ひ、茲に始めて認識可能になるのである。假令ば延長あり、抵抗ある對象は、眼で視、手に觸れて後に智性はその特質を判知し得るが如きがそれである。是れ經文の「箇々機能と協作用して對象を認識す」に應ず。

認識は、箇々機能の協作用を必要とする形式判断なるがゆゑに、何程其の判断が精密を盡し、何程範圍が擴大しても、それに依つて得る所の知識は、相對的現象界の外には一步も出で能はぬのは必然である。物理学・生物学・哲学等の諸科学は、其の進歩實に顯著なるものがあるが、科学に依つて絶対を理解することの不可能なるは、前述の理由で明らかである。絶対は、明かなる智性のみ能く感情的に直覺し得るのである。

如上絶対は、明らかなる智性の直覺する所であつて、學に依つて

理解し能はぬことは、假令はこゝに一個の時計あり、其の内部構造は、多様の齒車や車軸や螺狀鋼紐等より成り立つのである。而して學者は、其の構造を精細に調査して秒・分・時針の運動は螺狀鋼紐の彈力に基因し、其の彈力は、人の之を卷締めたるに基く迄は精確に理解し得べしと雖も、焉ぞ鋼紐を卷締めし現象的手の奥に存する絶対的原動力意志を認識し得んや。

前に全一活動全機關の動く原動力的意志は、根本智御自愛御自處、即全一活動本性、即統一原理、即一切知識の原型、即人道一般の原

理であると述べて置いたが、此の根本智御自愛御自處は、箇々欲の蔽ふところなき明らかなる智性の感情的に直観するところであるがゆゑに、根本智が人道一般の原理なることが明らかであり、科學に依つて原動力的意志の活動状態が具體的に整然判明するから、根本智が一切知識の原型なることも亦明らかである。人道一般の原理であり、科學知識の原型であるから、それは統一原理である、即ち全一活動本性である。

斯の如く全體研究の結果である一切知識を統一する阿吽阿教は、

眞の宗教である、所謂理智的宗教である。之に反して其の信條教理と、科學知識とが柄鑿相容れざるものは偽教である。宗教の眞偽を知らんと欲せば、其の教理に、全體を發展せしむる可能性が有るや否やを查明すれば、眞偽の區別は直に判明するであらう。

偏見我執を捨離した明らかなる智性が、阿吽阿の御自愛を自覺して、その無限愛に感激し、衷心阿吽阿に禮讚謝するところに智性、根本智の合致があり、南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿と斷へず禮讚謝を意識するところに、覺者の眞の宗教生活があるのである

自一四三頁四行至一四四頁二行、自一七八頁

阿吽阿の御愛は、萬有に洽く常に萬有を御引導向上せしめ給ひて  
息むことなきがゆゑに、個性は無意識ながら感激感謝したり、御導  
きに順ひて、交互扶持人道を實踐するに至るのである自七四頁八行  
至七六頁八行故に  
所謂愚夫愚婦も、能く御導きに順ひて安樂平和に生活してゐるもの  
も數多あるのであるが、惜むらくはこの輩は經驗範圍の狭きと、學  
問知識の淺きがために、多くの場合に道理中和の御道と  
因果則の妙理に由らずして、  
私欲を充さんと求めたり、空想を恣にして無意味の暗示に搖がされ

る傾向がある。この三つのものは相倚り相携へて、御導き錯覺の因  
を増長し、人を迷信に陥れて悠久に邪道に惑はしむるものである。  
洵に慨歎の至りに堪へざる次第である。されば如上素朴なる善男善  
女は、常に心を平和に持ち、かりそめにも道理を脱はずれて私欲を充さ  
んと求めず、一身を唯一御存在の御自愛に託して、慎で御導きに順  
ひ奉り、屢々經典を讀誦して阿吽阿の無限愛をはつきり悟り、南無  
阿吽南無阿吽南無阿吽阿と常に禮讚謝を意識して、現世安樂・永久  
幸福の妙境に合ひ奉らんと念願することが最も肝要にして、且つ焦

眉の急であることを、此の機會に懇切警告する次第である。

認識は、偏見我執を捨離して、自律自助・交互扶持する人道の業である。認識せずして、理智的に人事を實行することは、勿論不能である。故に人は、須らく正しき經驗と、學問上の知識を能く處世に適用し、人道の實踐、自他圓滿和同を期して生涯努力すべきものである。  
自三六頁七行至三七頁二行、一六頁二行乃至六行

根本智を自覺して、常に禮讚謝を意識し、靈界に感應して御導きに順ひ、偏見我執を捨離して中正に止り、正しく對象を認識して人

道一般を盡し、自律自助・交互扶持圓滿和同して、現世安樂・永久幸福を約束するものは阿吽阿教である。而して『阿吽阿經』は、其の順路の指針である。

### 南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

右は本年三月七日阿吽阿會館に於て講演せし草稿に、少しく添削を施し、今回『阿吽阿經』の再版をなすに當りて、卷頭に加へることにした。

昭和十二年十二月一日

富田俊次郎

阿  
吽  
阿

阿 吽 阿

第一

智

無窮に彌り自由活動する唯一御存在。

自由は絶対御存在の御特性、御活動の所以に御存在す。

智

時空を様とする御存在。

活動は時間を充實す。時間を充實することは存在、空間は活動の

様式。

智

有無を超越する御存在。

時間は無始無終、空間は無邊無涯、無始無終・無邊無涯は畢竟無。



智 御自愛御自處の妙動に因りて部分界一切萬有化成し、種々相現象し、種々境發展す。乃ち部分界萬有は、因果の御則に順ひて化易・推移し、御慈悲と崇め奉る愛の御引導に隨ひて進展・向上する所の根本智妙動の連鎖なり。故に萬有は、此の中和統齊の御道・御愛と御因果則の妙に因りて推移・進展・向上して、遂に根本智に契合完全す。

智 個性不二。部分界の箇々は、極微も其の構成も悉皆智性即ち智。是を以て箇々は必然活動す。箇々は箇々に必要の箇々欲、箇

箇機能を稟有す。箇々欲・箇々機能を賦けたる箇々は、智性たると與に個性。

箇々欲允に中和を得て智性明らかなる個性は、即ち全一の部分的顯現。

智性は、根本智を自覺し、靈界に感應し、箇々機能と協作用して對象を認識す。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

禮讚謝

第一

六

豁然として圓滿歡喜し、敬うやまつて白まをす。

南無阿吽阿 御引導に順したがひ奉る靈界・現象界悉わた皆俊とと俱ともに、謹つつしで無窮に彌ひろり有無を超越する唯一御存在を禮拜し奉る。

御愛を以て部分界を導まき給ひ、御因果則を以て齊ひとへ給ふ中和統齊の御道を讚美し奉る。

萬有個性を化成・推移・進展・向上せしめ、遂ついに

阿吽阿に合あひ奉りて、永久平和幸福を享たげ得えさしめ給ふ御慈悲を

感謝し奉る。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

俊

祈 禱

第三

八

敬て白す

南無阿吽阿 謹で御靈を禮拜し奉り、御道を讚美し奉り、御慈悲を感謝し奉る。

願はくは、御慈悲に頼り奉る靈界・現象界悉皆平和に進展・向上し、遂に阿吽阿に合ひ奉り、永久平和幸福を享け奉るべく導き給へ。

願はくは、萬有個性箇々欲に耽り、偏見我執し、邪道に迷ふとき

は、速かに悔めて智性明かに、一切思案行爲、中和統齊の御道に準由し奉るべく導き給へ。

願はくは、俊と同行の朋、堪忍・仁愛・禮義・廉恥・自律・自助・禮讚謝生活なる人道を實踐躬行し、偏見我執を捨離して清淨活動し、智性明かに、覺を成就して阿吽阿に合ひ奉るべく導き給へ。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

俊

皇室祖國

第四

天祖あまてらすおほみかみ天照大神 尊崇禮拜し奉る。

今上陛下 聖壽長久 皇室御繁榮を祈り奉る。 謹で天壤無窮の寶

祚まはを奉戴し、一君億兆・和輯わしよいつか一家の如き御國體祖國みくにたいそこくを衛まもる。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

俊

祖先考妣

第五

吾が家御先祖累代御尊靈、考妣かうひ御尊靈ごそんれいを禮拜し奉る。

御尊靈、阿吽阿あうあに合ひ奉り、永久平和幸福を享たげ給はむことを  
祈り奉る。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

俊

子孫

第六

一一

南無阿吽阿 願はくは、吾が子孫末流を心身健全に、偏見我執を捨離し、中和統齊の御道を體得して清淨活動し、智性明かに、覺を成就して阿吽阿に合ひ奉り、永久平和幸福を享け奉るべく導き給へ。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

俊

體認

第七

阿吽阿 言語文字げんごもじを用ひては、如何様いかように爲すとも表章すること能はざる絶對靈格、智・妙・覺の謂。

尙ほ一切音聲は、阿吽アウンの外に出でざるが如く、悉皆個性の最勝敬虔なる容儀・思惟・音聲を阿吽の二音を以て表章して、無窮に彌り有無を超越する唯一御存在を禮拜し奉り

御愛を以て部分界を導き、御因果則を以て齊へ給ふ中和統制の御道を讚美し奉り

一三

萬有個性を化成・推移・進展・向上せしめ、遂に阿吽阿に合ひ奉りて永久平和幸福を享け得さしめ給ふ御慈悲を感謝し奉る所の禮讚謝辭として、其れを環の窮り無きが如く繰返す意。

南無 なむ 歸命きめいの意こころ。

全一 禮讚謝祈禱に合掌して數珠を擦るは、合掌は、個性の交會即全一活動を象徴し、數珠は、萬有の一貫聯絡即全一を象徴す。

靈界 智性の境遇。

境界 個性念々の境遇。

禮讚謝 感謝して、謹で不斷の御引導に順ひ奉るを以て、禮讚謝の簡要とす。

祈禱 阿吽阿の御愛は普遍恒常なれば、個性は其の祈る事を専念して、只管御愛の力に頼り奉れば、感應即時著明すべし。即ち祈禱は、御愛を一向信賴するにあり。

正直 夫れ人無私の境に在りては、必ず自己の爲め、他の爲めにする或動作を樂むものなり。自己の爲めの動作も、亦必ず間接に他を利益すべき筈のものなり。

斯の自然意志を、其の儘正しく直く順行することが正直にして、即人道の發端なり。

人道 堪忍・仁愛・禮義・廉恥・自律・自助・禮讚謝・忠信・孝悌は、

凡そ中和統齊の御道に由る人界眷屬の常に履む道なり。

所謂正義も、亦斷へず變易して止むことなき世故に、善く時中活用する所の中和の御道の謂なり。苟も拘泥する所ありて遠き慮りも無く、偏に理窟を主張することは、中和統齊の御道に悖りて、其の弊害の及ぶ所測るべからざるものあり、慎まざる

べからず。祖國を衛り、祖先を崇め、子孫の正覺を祈るは、皆是れ中和の御道に叶ふ人界の道なり。

斯の人道を體得する人を、人格者とは敬稱するなり。

御國體 抑も我が萬世不易の御國體は、天祖皇祖の御神慮に基き、萬世に彌り、一君億兆一家族に異ならず。君は四海を家とし、萬民を子と慈視して其の福祉を専ら軫念し給ひ、民は君を父母と同視し、皇室を宗家として親み、尊び、畏みて、常に寶祚の隆、天壤無窮を奉祝す。

謹で國史を按ずるに、歴代の君民其の情父子の如くにして、未だ曾て一日たりとも乖離せる事なし。君は統治の大權を總攬して、下億兆の心を御心として統御し給ひ、下億兆臣民は、咸な一心之を輔翼し奉りて、齊しく其の仁澤に浴す。是れ御國體の宇内に比無き所以にして、寶祚の隆、天壤と窮り無き副因亦茲に在りと拜察し奉る。今や 明治天皇は、欽定憲法を以て國務大臣大政輔弼の責に任ずる制度を定め給ひしを以て、萬世一系 天皇の尊嚴神聖にして犯すべからざる由縁、益々鞏固なる

事を恐悦し奉る。

此の如く君民和輯・上下信賴する二千六百年の史實は、宇内其の比無きは勿論、假りに社會の安寧、民衆の最大幸福の爲めの最勝統制組織を理想考按するも、到底有史前以來、自然整齊の此の御國體に勝るものを理想し能はず。凡そ社會の安寧と民衆の最大福祉は、實に此の如き家族的親和信賴の事實に依存す。此の有難き理想的國土に生を享けたる者は、何の幸か之に如かむや。皇室は子民の神髓なり、凝意なり。此の故に我等は、



身を忘れ家を顧みず、率先して 皇室を擁護し祖國を衛るなり。  
此の天壤無窮の皇運と萬代不易の國民性が、我が御國體の精華  
なり。

祖先奉仕 祖先に仕ふるには、敬を第一とす。前に在ます御靈を  
日々禮拜して怠ることなし。

父母御他界に當りては敬虔斂葬し、謹で御在世の徳行を稱頌し、  
家に傳へて永代尊重忘るゝこと莫し。

親族に對する儀禮は、右に准じて唯だ次第あり。

處世 世路難に處して、徒らに勞困すること莫し。淳朴快濶歡喜  
して、御活動連鎖機能たる本分を奉行せむと念願す。

清淨活動 常に禮讚謝して、一切思案行爲自ら中和統齊の御道に  
叶ふ交互扶持の働。

世上在來の信仰は、多くは智性を敬禮するものと觀て、敢て  
之を尤めず。堪忍・仁愛・親切以て阿吽阿の御道を廣く世界に  
傳へて、悉皆同行、遂に阿吽阿に合ひ奉らむと念願す。

誠心此の教を遵奉し、上記の條項を能く體認し、謹で御慈悲

を仰ぎ奉る。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

俊

遺 囑

第 八

俊七八歳の頃、自分は人として安心し得る何の信念も無く、寔に寂しく感じゐたりき。長ずるに及びても、この寂しさは少しも去らぬのみならず、更に自分は自己以外の世界に如何なる關係あり、如何なる境遇にあるかにつきて、少しも知る所なきことが、益々不安を深からしめぬ。爾來、此の最大事の眞諦を望みて一日も息むことなかりき。然れども少時は、人並に自律・自助、立身の術を主として學ぶ要あり。家を成して後は、生事に忙はしくして冥想思索した

り、又は哲學宗教などを篤く研究する程の餘暇はなかりき。是を以て人生の第一義に關する學問上の見聞は、實に一斑片鱗に過ぎざれば、敢て諸宗教・哲學を批判するにてはなけれども、俊の知る限りに於ては、彼れも此れも其の觀察覺知の到る所、阿吽阿に及ばざること遙に遠しと思はる。蓋し妙の幽玄なるに驚嘆し、其の深遠なるに眩惑したるに因るか。孰れも種々想像を逞しくして、其の多くは空想盲斷に陥り、甚しきは學知の全く容れざることを妄信するものあり。之に加ふるに元來絶對を言明するに不適當の言語文書を用ひ、

甲乙丙丁、論註疏說し、卻つて之が爲めに一層晦澁混雜を累ね、益人爲の迷宮に深入して、自失混淆に沈淪せるもの多しと思はる。然れども何れの教も、本來教祖の智性動機に緣りて成る言行なるが故に、其の修身處世に關する指示は、洵に萬世の規範とするに足るもの多し。故に是等教に與する輩は、事に對し機に臨み、慎みて思ひ、明かに辨へ、中和統齊の御道に協ふやう之を時中活用すれば、益を得ること甚だ多かるべし。然れども是等の教を學ぶ者、往々之を以て修身處世の模範と心得、惟だ外面的に只管耳に聽き、目に視る

形式の上の練習に止まる者あり。學業成りて、既に二次性と成りたる者は幸なり。其れとても、其の由つて來る所の本原を覺る者の安樂なるに如かず。況んや其れにだにも及ばざる多くの輩に於てをや。大道廢れて仁義有りの嘆ある所以も、亦此にあるか。

此の如く不安の五十餘年、速くも過ぎて俊が年六十歳を超えし頃、幸に御引導に由りて遙に覺を窺ひ得たり。年方に六十八歳、昭和四年十一月十八日の曉、豁然覺に邇づき得さしめ給へり。俊の歡喜は、言語文字の能く表はし得る所にあらず。嗚呼有難き哉、勿體

なき哉。

智 個性不二なるが故に、吾曹個性が根本智を自覺するは、固より當然なるにも拘らず、覺る者の少なきは、唯だ是れ個性が、其の箇々欲に執着するが故に、種々境に或は凝滯し、或は輪廻轉生し、煩悶苦惱して智性の明らかならざるが故なり。

苦悶の境界を解脱し、安樂平和の境に到るは、唯だ其れ箇々偏見執着を捨離して、智性明かに、稟性至善の中和の御道に準由して清淨活動し、遂に阿吽阿に合ひ奉る一途あるのみ。

個性は御活動の連鎖なるが故に、其の性能固より神聖なるも、箇欲智性に剋つときは、我欲相應の境に留滞して進展向上を障礙し、連鎖機能本分の圓滑なる活動を弛緩す。箇々欲中和にして智性允まことに明らかなれば、有情を愛し非情を護り、交互扶持して同根一體、智個性不二を實證すること、例へば太陽光線の分れては七色となり、合すれば無色となるが如くあるべし。若し七色私に其の本來の濃淡を損益することあらむか、安んぞ和して復た無色となることあらむや。人も亦所謂心の欲する所に従ひて矩かねを踰へざるは、七情誠に中

和なる聖者なり。智性の明らかなる個性、即ち全一の部分的顯現に庶幾ちかしと謂ふべし。

種々境に流轉する個性も、時に無我境に住して、箇々欲誠に中和に、智性允に明らかなるに當りて妙覺することあるべし。是れ即ち根本智なり。御慈悲なり。御引導なり。中和統齊の御道なり。一切善藏なり。

此の如く御慈悲は、常に萬境に洽く、一切を善に導きて息むことなれば、個性は唯だ箇々偏見我執を捨て、内に省れば、正しき

御導きは、常に其の所にありと知るべし。

此の故に御導きに従ひて行へば、必ず心に怡よろこありて身も胖ふかなり。之に反して御導きに戻りて行へば、心憂ひ結ばれて、體も亦安らかにあり能はず。

凡そ善と云ひ悪と云ふは、個性の思案行爲が、御道に準由するや否やのことなり、御道に乖くわい違いすることの小大が罪の輕重なり。總じて善なるもの悪なるのは、愛の御導きと御因果則の齊へ給ふ所、善なることが存立し、悪なることが畢竟絶滅す。

所謂明德を明かにすと云ひ、至善に止まると云ひ、六度の行と云ひ、十字架を負ふと云ふこと、皆な是れ中和統齊の御道に準由する徳目なり。

抑も愛の御導きは、超因果則の妙にして、因果必然の運行を少しも妨ぐることなし。一切を相援け相濟ひ、以て部分界萬有を導き向上せしめ、遂には完全せしめ給ふ御慈悲なり。

然るに個性一般は、唯一御存在の御特性を賦けて狹義の箇々自由を有するに依り、多くは我欲にのみ執着すれども、既に此の教を

聞きて善惡の分別を知る輩は、謹で人道を實踐躬行し、偏見我執を捨離して清淨活動し、一切思案行爲内に省みて御引導に順ひ奉るべし。然る上は必ず智性明らかとなり、遂に覺を成就して阿吽阿に合ひ奉り、圓滿歡喜して輪廻流轉の一切苦惱を脫離し、現世安樂・當來平和・永久幸福を享くべきこと必定なり、疑ふこと勿れ。

凡そ個性は、箇々欲に耽溺するの故に、念々相應の相を現はし、相々應の境に或は凝滯し、或は輪廻流轉すること洵に慨はしき極なり。今幸に遇ひ難き人界に生を享けたる輩は、如何にも堅固に人道

を實踐して、此の有難き正覺成就の當場を逸して復た人外に墮ちることなく、更に一段の向上正覺成就を以て終生の念願とすべし。

五慾放縱罪障重く、一旦人外に墮ちし極重惡人なりとても、現世の終りに臨み、誠に過去の惡業を悔ひて

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿と一向念誦して眞實人道に由るべく、一念發起すれば、其の一念相續して來世に延長し、當來は復た人界に生を得て正しく人道を實踐し、偏見我執を捨離して清淨活動し、覺を成就して萬境該總の阿吽阿に合ひ奉り得る機會を授け與

へらるべし。是れ寔に阿吽阿の妙御慈悲の賜なり、必ず疑ふべからず。此の大事世上罪障重き人々片時も忘るゝことなく、常に懺悔して後生善所と祈りて、不意臨終の用意あるべきなり。

人界とは、其の眷屬必ずしも人間たるに限らず、人道に由るものの境遇なるが故に、人間は勿論、或は非人眷屬にてもあり得べし。

總て個性は、其の寄る所の境に依りて永久に存生す。

智性は常に根本智を自覺し、靈界感應あるべきものなれども、箇々欲之を遮りて智性隱顯常ならず。然れども一度び此の教を聞く

者、偏見我執を捨離して尤まことに誠まことに箇々欲中和なれば、必ず智性明かに、遂に覺を成就して阿吽阿に合ひ奉るべきこと必定なり。拳々服膺勉めよ。兄弟姉妹、每朝夙に起き、靜坐して禮讚謝し祈禱して、數百遍乃至數千遍

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿と繰返し唱へ奉るべし。而して常に此の觀念に止住すべし。

靈界感應は、全然超經驗にして智性直接の感應なり、箇々機能の關與する所にあらず。對象認識に於けるが如き機能に關係ある客觀



類似のことは、是れ皆な箇々妄想か、否らざれば箇々機能に潜在する雑多なり。決して天啓なりとか、又は託宣なりなど、妄信すべからず。

認識は、箇々機能との協作用に成る智性の対象直観判断なるが故に、箇々機能の發育不足又は故障あるに因り、或は現象觀察に數々しばしば隨起する錯覺に原因して誤謬認識に陥るは、是れ當然の歸結なれば、人たるものは體育知育に留意して、心身諸機能の完全成長を圖り、且つ諸科の學知を能く應用して、一切經驗上の誤謬を匡正して普遍

認識を誤らず、御因果則の脈絡條理を慎重に考按明辨し、善因善果を成就して正しく人道を躬行し、中和統齊の御道遵守に資すべし。

爾等吾が子孫、爾等俊の跡を紹ぎ、幸に覺を成就の上は、清淨活動して智性明かに、御活動連鎖機能たる本分を歡喜奉行すべし。是れ寔に現世安樂・當來平和・永久幸福の御約束なり。冀くは爾等子孫、縁ある同胞に此の教を傳へ、自ら模範となりて他を導き、圓滿歡喜を衆と共にすべし。

爾等子孫を輔佐して此の教を廣く世界に布き傳ふること、竝に此

の教を核心とする文化事業の作興を以て、吾が同行の邇覺者に屬託す。

未だ覺に邇づき得ずして、他人の援助を頼みに生活の手段として布教傳道するが如きは、其の言行に誠實の根柢なければ、知るや識らずに他を惑はし、教旨を擾す虞あれば、布教傳道は、自給自辨する先覺者の奮つて之に當らむことを奨む。

然れども爾等子孫の統裁下に、有給庶務員を任用するは、敢て妨げず。

敬て阿吽阿教布教傳道一切を、主として爾等吾が子孫に付屬す。  
南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

昭和五年三月十日記

富田俊次郎

感謝生活

## 感謝生活

(始中終記)

夫れ萬有個性は、部分界箇々活動、偶箇々欲偏見して、或境に留滞すること久しくして、其の境現象し、智性を被ふによりて成る假の姿なることは、既に部分界化成・推移・進展の次第阿吽阿第一に明らかなるが如し。然り而して個性は、愛の御引導常時向上に對して箇々欲偏見反動し、因果則の制節によりて一時中正を得、復た更に反動被制節の運動を繰返すなり。是れ交互扶持の行はるゝ所、一切煩悶苦惱の動く所にして、寔に個性迷故の状態なり。然れども御

愛常時向上の御引導と、御因果則悠久不斷の制節により、個性は益々向上進展す。

萬有交互扶持關係の一例。人間によりて言はむに、抑も胚胎の始は専ら親の扶持によりて發育し、出生して後は親の扶持は無論のこと、之に次ぐに衣食住一切外物の扶持に資りて生を維持す。一碗の飯一片の麵麩だも、幾百千粒獨立生の犠牲と、幾多勞作の賜である。衣住亦此の如し。親の生と衣食住資料の由て來る所を索むれば、其の交互扶持の關係、時間的無始の始に溯り、空間的十方無邊際に及

ぶ。一切萬有、一貫聯絡の理正に此の如し。就中親子の關係最も近密なり。されば孝を人道の本原、百行の基礎と觀るは、寔に當然の事なり。之に次ぐに子孫を慈育し、親疎遠近の次第あるも、博く衆を愛護し、個性全般の推移・進展を助成するは、是れ交互扶持各自の本分なることを、吾曹の宜しく體認すべき筈のものなり。

斯様にして個性は、御愛常時向上の御因導と、御因果則悠久不斷の制節により、遂に至善中正に止り、交互扶持亦漸く圓滿和同して正覺成就し、此に一境凝滯の素因消え、箇々偏見斷絶して無臭

無色智性の活動、永久幸福の妙境阿吽阿に合ひ奉る次第である。  
此の御慈悲は、吾曹個性の常に崇仰感謝して片時息むことあるべ  
からざるものなり。是を感謝生活と謂ふ。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

昭和八年十一月十八日

富長俊次郎

子孫に告ぐ

### 子孫に告ぐ

予は、予の家系相續人及び卑屬一統、左記諸項を能く諒解體認すること望む。

一、毎日數百遍乃至數千遍、南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿と繰返し、禮讚謝祈禱すべし。又數々しばしば「阿吽阿經」を讀誦して、中和統齊の御道を體得することに勗つとむべし。

一、迷想迷信は、一切心身疾患の素因なることを克く辨へ、斷じて之を近づくべからず。

一、阿吽阿會長若くは阿吽阿教會長は、謹で會の目的遂行に勵精するは勿論、克く會員間の友愛親睦を圖り、平安にも艱難にも相互に慰安して、中和統齊の御道に遵ひ由るべし。

一、予は、日々

天祖天照大神を崇拜し 今上陛下 聖壽長久、皇室御繁榮

を祈り奉り、謹で天壤無窮の寶祚を奉戴し、一君億兆・和輯一家の如き御國體祖國を衛らむと念願する習なり。

天照大神を崇拜するによりて、畏れ多くも 皇祖宗は勿論、朝

廷に於かせられて祭祀し給ふ神祇を同時崇仰する信念なり。是れ我が國體の肝要にして、神國たる所以、亦此にありと信ず。冀くは子孫、予と同意實踐を懈ることあるなかれ。

一、忠君愛國の教は、古來我が神國に備りあり。宜しく先輩に就いて學び、尙ほ内に求め、慎で實踐躬行すべし。

一、山よりも高く、海よりも深き親の恩は、之に報ゆるは敬を第一とし、内に求めて外力を致し、後日願て悔なきやう念慮懈らざるにあり。庶幾くは大過なからむ。



一、予は、過去現在一切の被扶持に對し、毎食事を機會に謹で感謝し、同時に自己本分行爲如何と省るを習としてゐる。

一、後日予の他界するにあたりて、子孫の哀惜せむことは、洵に純孝の至なりと思ふ。さりながら假の姿の自然遷化することは、心を盡して後は力及ばずと諦むべし。眞實予は、少しも易ることなければ、爾子孫と感應亦易ることあるべからず。對話接觸不能の故に寂しく思ふこと莫れ。胥與あいつとに靈界に活むものなり。

骸軀は、遺族寄合ひ、虔つしんで歛かきめて茶毗だひに附し、近親一人司會し

て阿吽阿に合ひ奉る予を、俱に歡びて讚美すべし。

歛葬は、一切阿吽阿式によりて行ひ、迷信的形式一切無用たるべし。但し往事を偲ぶ遺族の衷情を表する香花其の他の物を供するは、迷信行爲と認めず。

一般會葬又は告別式の儀は、一切無用たるべし。

一、予は、毎年子孫寄集り、先づ親睦し、往事を追慕し、質素敬虔先祖を祭るは、子孫の善行、一族の美風として欣ぶであらう。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

講演筆記

昭和八年十一月十八日

富田俊次郎

五四

## 序

予は、最初阿吽阿を著しました節は、後日に至つて其れ以上に何等附加する意志はなかつたのであります。其の理由としては、予の生來訥辯なると文章に拙きとは、若し其れに何ものかを附加するに於ては、却て阿吽阿本有の意味を傷つけ、救ふべからざる誤傳の基ともなるを憂ひ、斯ることは寧ろ予に共鳴する筆舌熟達の後生に俟つに如かずと考へたからであります。然るに其の後、度々身邊の者より阿吽阿は現在有るが儘にては、讀者其の了解に苦しみ、

寧ろ誤解せらるゝ虞さへもあると思はるゝが故に、補遺註釋の意味を以て、假令粗雜なりとも無きには勝ると思ふから、勉めて一通り講演せよとの勧めがありましたので、訥辯乍ら本日、阿吽阿會館落成披露の御挨拶を申し上げます此の機會を始として、今後數回に涉り阿吽阿に就き、少しく演べやうと思ふのであります。暫の間、御靜聽を願ひます。

昭和十年二月二十四日

財團法人阿吽阿會本部にて

富長俊次郎

## 阿吽阿

先づ題目につきまして演べますが、是は別に體認第七の始めに掲げてあります通り、絶對靈格は、言語文字を用ひては何としても表章し能はぬものであります。則ち口を開き言はんとして、先づ阿と發音しても繼ぐべき音の出る所を知らず、唯默して吽と口を閉づるの外はありません。そこで復更に言はんとして阿と發言しては、再び次に發すべき音を辨へませんので、又默する外ありません。是れ畢竟言語道斷の靈格と言ふ事を意味して居ります。然し言語道斷な

がらも、絶対についての思念を方向づける便宜上、假りに智なる言字を用ふること、致しました。其の所以は予の観る所、宇宙は叡智其のものであるからであります。又形容的にも時間的・空間的に縦横無窮に彌るものを章すには、其れが他の言字に比し、より適確に邇しと思はれるからであります。標題の謂れ此の如しとして、偕て是より本題につき演ぶるのが順序であります。其れよりも寧ろ逆に本題第一を體認した者の當然懐くべき概念の大要を演べることに、却て阿吽阿についての自覺を促すに便宜多しと思ひますから、一ト

通り予の體驗をお話することに致します。固より體驗談でありますから、決して他を批評するのが予の本意でないことを、特に御承知願つて置きます。

遺囑おしごと第八の始めにあります通り、予は幼少の時より人生の第一義知識に就き知る所なき寂寞感に勝へなかつたのであります。爾來何か確實なものに頼つて以て安心を得たく種々思ひを回らし、一斑片鱗ではありましたが、所謂先覺者の知識と其の垂教を検討して、予の尋ねるものを其の中に探し索めたのであります。其れに依ると、

或教では凡有るものは業因によつて出来たものである。此の穢土に疾ふものも、無上正覺者を信仰し、其の名を稱ふることのみに依つて覺者の誓願たる一切救濟の恵を享け、當來は必ず極樂淨土に往生すべしとの決定と。又云ふには、悉皆萬有は本來覺者と同性を通行するが故に、悪因を滅却すれば遂には覺者と成り得べしと云ふことを眼目とする如くに思はれたものと。又他の教では、凡有る物は自分の父なるゴッドの創造したもので、自分は其の子である、自分をゴッドの子なり救世主なりと信ずるものは救はれん。故に世上の人

人は、其の私慾を捨て、隣を愛し、自分がゴッドの子であり、救世主であることを信じて永久の生命を享くべしと云ふのが、主なる眼目らしく思はれました。又或學説では、宇宙間には唯だ物あるのみ、物以外に心もなく、又靈と観るべきものもあるべからず、物は物自身に必然的に機構し、必然的に推移するものなりと観る説のやうに思ふのがありました。右の外にも數々の教はありますが、著しいものは、右の如きものであります。

斯の如く教が數々ある以上は、何れが果して眞理であるか、豫め

研究辨別しなければ、頼つて以て安心すべきものを知ることが出来ません。そこで先づ前記の第三の宇宙は唯だ物あるのみと観る學說に就いてありますが、此の説は、何としても予の同意致し能はぬものであります。予の觀念では、萬有は奈何に觀ても統齊せられたるものにして、萬物は常に其の統齊に順つて推移・進展するものと観るより外には、理解し能はぬのであります。故に此の説は、是れ以上研究することを斷念したのであります。

第二に掲げました教は、凡有るものは一定時に創造せられたるも

のなりと云ふのでありますが、萬物は古來間斷なく進展進化と云ふに同じして來たもので、今後も亦斯くあるべしと観るのが近世人の見解であり、予も亦一切萬有は、統齊に順つて常に進展するものと観るより外に餘念無いのであります。此の現象界に、一物として一定固着するものがあるとは考へ能はぬのであります。又所謂ゴッドの子なり、救世主なりと信ずるものは救はれんと云ふ言葉の裏には、信ぜざるものは、救はず棄て、顧みぬと云ふことを暗示してあるやうに思はれる。のみならず世の終りに臨んで、ゴッドの子更に世に出で、過去

現在悉皆人類の功罪を裁判して、罪の重いものは之を永久滅盡に附すると云ふことでありますが、此の信ずると否とに依つて救ふと棄てるとの二つに斷ずること、世の終りに到つて、曾て地上で罪を犯したものは容赦なく壞滅せしめると云ふことの二つは、愛憎の行はれる人間界に於てさえ甚だ忍び難きことにして、之を敢て爲さんとする主を、一切抱擁唯愛あるのみであるべき筈の天主なりと認め、  
 ることは、何としても予の得心し能はぬ所であります。上の三點は、甚だ會得し難きが故に、予は此の教によつては、安心を得難しとし

て斷念したのであります。

第一に掲げました教は、其の説く所は教派に依つて一様ではありません。或は物・心の二元を認めるが如く、或は唯識の一元のみを認めるが如く、尙ほ正覺も、亦己を正して苦因を滅し、煩惱を解脱して衆生を淨化する所の極上道德を指すもの、如く、或は其れ以上の或ものを意味する如くにして、諸説多岐複雑なるがゆゑと、此の教では絶對觀に關して、及び現象界の始・中・終觀に關して、説くところ何分にも審かならず、甚だ解し難きがゆゑに、此の教の中に



も、亦予の索めるものを發見し得なかなたのであります。

以上二教に就いて予の不満足に思ふ主なる點は、第一は絶對觀に關して、第二は現象界の始・中・終觀に關して、第三は無條件信仰を救濟の前提とすることに關してあります。

御愛御慈悲をはつきり自覺し、衷心感激して歸命信仰するのが眞の信仰であります。之に反して信仰を前提とすることは、批判を禁制して教義に權威を付け、信者に盲目服従を餘儀なくせしめるもので、丁度催眠術に罹る者が、施術者の暗示のまゝに言行するに似

たものがあるのであります。催眠術に罹れる夢遊者は、何時かは覺める時の來るべき筈でありまして、相も變らず我執偏見・輪廻流轉の徒たるを免がれません。レーニンが、宗教を貶して阿片なりと云つた理由も、此にあるのであらうと思ふのであります。併し乍ら前記二教の如きは、古來人道的に人心を和げ、甚しい荒肆に陥らしめなかつた功績の大なるもの、あることは、予も亦之を頌贊するに吝なるものではありません。

以上演べました如く、此等の教又は學說に依りては、予の最初か

ら懐く寂寞不安感は依然として何等慰められる所もなく、一時は失望の野に彷徨したのでありましたが、尙初一念に冥想して息むことがありませんでした。其の中に不思議に阿吽阿を自覺して、豁然として雲霧の一時に霽れた様になりました。今更に阿吽阿の有がたさ勿體なさを泌みくく感謝して、感涙に禁えなかつたのであります。萬有は、元は智妙活動の連鎖部分である無臭無色の智性でありませんが、其れが連鎖活動中偶々或境に留滞し、之を久しくして其の境遇現象化したものであります、所謂現象界なる萬有個性の始であり

ます。箇々欲偏見執着し、輪廻流轉・煩悶苦惱を繰返す個性も、其の或境に滞る思念即ち箇々偏見を斷絶すれば、復た本來の無臭無色の智性に還り、根本智に契合して全一活動永久幸福の妙境に合ひ奉るのであります。然れば此の現象界は勿論變態でありますから、個性は御引導に順ひ奉ることに依りて、此の變態原因我執偏見を斷絶し、遂に智性明かになり、永久幸福の妙境根本智に合ひ奉るのであります。此の御引導に順ひて我執を捨離し、偏見を斷絶する次第が、即ち次に演べます所の萬有の中間期であります。一朝にして

全然我執偏見を斷絶し能はずとも、及ぶ限り力を竭して息むことがなかつたならば、遂には無臭無色の智性明かになります。例へば覆面をする者は前方を視ること能はないが、覆ふ所の布帛を段々に除去すれば、布帛の薄らぐだけ其れだけづゝ次第に前面に明を認めることが出来て参りますやうに、努めて我執偏見を避け遠ざければ、刻々に努力相當幸福の妙境に近づき、遂には根本智を自覺するに至るのでありますから、我等個性は夢寐にも油斷なく、我執を捨離し、偏見を斷絶する努力の一路を邁進すべきであります。

茲で少しく附言して置きますことは、箇々偏見即ち思念其のものが現象すると云ふことゝ、現象界萬有は終には無臭無色の智性に還元すると云ふことゝは、現實の見聞世界に慣れたるものには、容易く了解し難き問題であります。之は予の直覺でありますが故に、此に確證を擧げて説明するのは困難であります。併しながら其れは恐くは、知識の不足に因ることであらうと思ふのであります。なぜならば物質は、ポジトロンやエレクトロンなどゝ名付けるものゝ運動から成立つと云ふ學説もあり。ラジウムやウラニウムなどゝ名

附ける放射物體は、放射に依つて其の物量を減ずる波体の蒸發に依つて、減量するのとは全然異なる意味に實驗もあるのでありますから、現今の科學知識を標準として絶對を豫斷することは、須らく遠慮すべき事と存じます。無形の電子運動と有形物質、放射物體減量と物質不滅説を一つの參考とし、思念と現象、偏見斷絶と現象滅盡の關係を、篤と究明すべきであります。卒爾に此の關係を否認するのは不謹慎であり、宜しく知識の進歩を俟つ外なしと確信するのであります。

前に演べた如く個性が偏見執着して、種々境に或は停滯し、或は



流轉して其の境遇を煩悶苦惱してゐる間も、阿吽阿の御愛は、萬境に洽く常に萬有を御引導向上せしめ給ひて息むことなし。之は個性が無意識に御愛を感じて感激感謝し、或は交互扶持することによりて知られるのであります。然るに悲しい哉個性は、又復箇々欲偏見御引導に反對し、求めて煩悶苦惱を繰返へすのであります。阿吽阿の御愛は、引力磁力の作用に間斷なきが如く、常に個性を引導向上せしめ給ふばかりでなく、之に加ふるに御引導に背戻する行爲を、廣い意味の御愛に依つて制節矯正し給ふにより、個性は其の背戻す

る所の質量相應の物理的・精神的・遺傳的・被制節苦惱を受けるの  
 であります。背戻と制節は、背戻事實の表裏にして、背戻すれば必  
 然制節が伴なふのであります。其のおかげで個性は、一方我執・偏  
 見・不注意御引導に順はざるは不注意を慎しみ、他方、悠久不斷の御引導に由つて益  
 進展向上して、遂に至善中正に止まるのであります。是の如きは、  
 世上現前の有様であります。歴史・劇作・物語・稗史・小説類も、  
 亦斯る向上背戻被制節の渦うずまきに、愛惡哀樂する古今世態の描寫に外な  
 らぬのであります。

阿吽阿は、申す迄もなく絶対でありますから、信ずるが故に救ひ、  
 信ぜざるが故に棄てるとか、命令に忤さかふが故に罰し、能く守るが故  
 に特に擇んで愛すると云ふが如き、彼れと此れとの偏頗もなく、又  
 相對的目的のあらせらるゝ筈もないのであります。唯だ御自愛妙動  
 に伴なふ部分界の常時向上御引導と、悠久不斷惡業制節の御慈悲あ  
 るのみであります。此の御引導御慈悲の洪大なることは、人を其の  
 信不信・知不知によつて區別せざるは勿論、宇内の有りと凡有る禽  
 獸蟲魚・一切生物・草木塵芥・土石に至るまで、悉皆抱擁一として

漏れるものがないのであります。此の常時向上の御引導が、即ち宇内萬有の進化向上して息むことのない第一原因であります。

斯の如く洪大なる阿吽阿の御愛を知覺しなかつた過去は致方なし、一度阿吽阿を自覺した後は、離れんとして離れることは出来ません。又忘れやうとして忘れ能はぬのでありますから、只管御愛を感謝して中和の御道に準由し、畢生の力を盡して御引導を順奉し、悪因を逃避すべきであります。若し一心堅固にして不退轉なるに於ては、現世は必ず安樂にして、當來は永久幸福の妙境に生れるので

あります。其れに及ばざるものも亦日々の努力相當に苦惱減退し、其れだけ安樂増益して、未來は復た人界に生を享くべき必然の約束であります。然るに悲しい哉猶我執偏見念々流轉するものは、何時所謂地獄界に墮ちるか知れないのであります。現世は過去の情勢によつて外面人皮を被るとても、内に獸的偏見念々相續するに於ては、其の儘既に獸界の眷屬でありますから、内なる念々延長して、來世は獸界に墮生すべきは必然の約束であります。どうしてこれが怖れずにあられるでございませうか。若し現世に於て、假令一步たりと

も向上して永久幸福の妙境に近寄ることなく、相變らず背戻煩悶を繰返すに於ては、前途の悠久と苦惱の無量を覺悟せざるべからず。遭ひ難き人界を空しく過ぎ、復た何の世に正覺成就を期待するや。

阿吽阿の妙御活動は、智性の連鎖活動と成り、現象界に在つては萬有の交互扶持運動として現はれるのであります。其れ故に、智性は申す迄もなく必然に本性を稟有して居りますから、個性としても箇々欲に蔽はれる所なくば、智性明かにして自ら隣を愛し、交る交る互に扶け持つのであります。然るに唯だ一つの我執偏見が種々雜

多の不和・對立・反抗の因となつて、交互扶持・圓滿和同を阻害するのであります。洵に悲しむべき次第であります。萬物の靈長たる人間は、此の我執偏見の悪因を捨離し、内に存する智性を明かにし、以て堪忍・仁愛・禮義・廉恥・忠君・愛國・信友・孝・悌の人道を躬行して、煩悶苦惱の悪因を避け、圓滿に交互扶持和同して、俱に樂土に安住すべきであります。古來賢哲の遺訓は、人道を説くこと甚だ詳でありますから、能く之を研究して參考應用すれば、人道の實踐上便且つ益を受けることが多いと思ひます。

交互扶持は、個性の本分なることは前に演べた通りであります。人間社會に在りましては、自律・自助が社會構成々員たる資格の必要條件でありますから、本分・條件恰も車の兩輪の如く提挈して、相俱に前進すべきであります。自律・自助を怠ることは、聯絡活動連鎖の一つに缺陷が出来たことになりますから、全體の活動上自然に自律・自助を怠る者は、社會構成員團體より落伍して愬ふる所なき危地に行き詰る様になります。之は自業自得で洵に止むを得ざる因果であります。然し隣人としては、個人としても將又團體員とし

ても、宜しく道心を鼓舞して之に教へ、之に忠告し、之を導き、之を助けて自律・自助の大路に立たしめるやうに勗むべきであります。然して猶自立し能はぬものは、孤獨・癡疾と共に其の生活と慰安の爲に、分に應じて盡力するのが、交互扶持當然の本分であります。さて是まで演べました通り、萬有は此の悠久中間期に於て、常時向上の御導きと、間斷なき惡業制節の御愛に依つて終に至善中正に止り、交互扶持亦圓滿和同して、無臭無色智性の活動、永久幸福の妙境阿吽阿に合ひ奉るのであります。此に到つて現象界萬有、始・中・



終の次第、一と通り了解せられたと信ずるのであります。

以上縷々演べし所を一言に要約すれば、一切思案行爲、唯慎で御引導に順ひ奉れば、萬德其の中にありと言ふことであります。既に斯の如く明かに自覺したる上は、慎で御引導に順ふ外に、何一つも不足あるべき筈なし、唯感激感謝あるのみであります。

是を以て、予の體驗談は訖りました。以下阿吽阿に就いて、其の大畧を演べることに致します。

## 阿吽阿

### 第一

智 無窮に彌り自由活動する唯一御存在。

自由は絶対御存在の御特性、御活動の所以に御存在す。

智 時空を様とする御存在。

活動は時間を充實す。時間を充實することは存在、空間は活動の様式。

智 有無を超越する御存在。

時間は無始無終、空間は無邊無涯、無始無終・無邊無涯は畢竟無。

智 御自愛御自處の妙動に因りて部分界一切萬有化成し、種々相現象し、種々境發展す。乃ち部分界萬有は、因果の御則おんのりに順ひて化易・推移し、御慈悲と崇め奉る愛の御引導に隨ひて進展・向上する所の根本智妙動の連鎖なり。故に萬有は、此の中和統齊の御道御愛と御因果則の妙に因りて推移・進展・向上して、遂に根本智に契合完全す。

智 個性不二。部分界の箇々は、極微も其の構成も悉皆智性即ち智。是を以て箇々は必然活動す。箇々は箇々に必要の箇々欲、箇

箇機能を稟有す。箇々欲、箇々機能を賦けたる箇々は、智性たると與に個性。

箇々欲允に中和を得て智性明らかなる個性は、即ち全一の部分的顯現。

智性は根本智を自覺し、靈界に感應し、箇々機能と協作用して對象を認識す。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

俊拜記

右は、予の直覺するところであります。眞理は、究竟萬人の齊

しく覺るべき筈のものであります。ゆるるに姑く各位の自覺を俟つこととして、こゝに其の意義を述ぶることをさしひかへます。併し予の體認する所は、前の體驗談によつて略ぼ御了解なりしことゝ信ずるのであります。

## 禮讚謝

## 第一

豁然として圓滿歡喜し、敬て白す。

南無阿吽阿 御引導に順ひ奉る靈界・現象界悉皆俊と俱に、謹

で

無窮に彌り有無を超越する唯一御存在を禮拜し奉る。

御愛を以て部分界を導き給ひ、御因果則を以て齊へ給ふ中和統齊の御道を讚美し奉る。

萬有個性を化成・推移・進展・向上せしめ、遂に

阿吽阿に合ひ奉りて、永久平和幸福を享け得さしめ給ふ御慈悲を感謝し奉る。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

俊

前に演べし如く、萬有は常時向上の御引導と、悠久不斷惡業制節の御慈悲により、箇々偏見斷絶して至善中正に止り、交互扶持圓滿和同して、終に永久幸福の妙境阿吽阿に合ひ奉るのであります。其中正和同の御道に統一し、之に背くものを制節矯正して中和一筋に齊へ給ふ御愛を、前記第一の通り正に自覺し、御愛の有難さ勿體なさに感激したる者の先づ靈界・現象界悉皆と共に、謹で靈格を禮拜し奉り、中和統齊の御道を讚美し奉り、萬有を導きて、遂に永久幸福の妙境阿吽阿に合ひ奉ら

しめ給ふ御慈悲を、感謝し奉る所の智性必然の顯現であります。

## 祈 禱

## 第三

敬て白す。

南無阿吽阿 謹で御靈を禮拜し奉り、御道を讚美し奉り、御慈悲を感謝し奉る。

願はくは、御慈悲に頼り奉る靈界・現象界悉皆平和に進展・向上し、遂に阿吽阿に合ひ奉り、永久平和幸福を享け奉るべく導

き給へ。

願はくは、萬有個性箇々欲に耽り、偏見我執し、邪道に迷ふときは、速かに<sup>あつた</sup>俊めて智性明かに、一切思案行爲、中和統齊の御道に準由し奉るべく導き給へ。

願はくは、俊と同行の朋、堪忍・仁愛・禮義・廉恥・自律・自助・禮讚謝生活なる人道を實踐躬行し、偏見我執を捨離して清淨活動し、智性明かに、覺を成就して阿吽阿に合ひ奉るべく導き給へ。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

俊

常時向上御引導と、悠久不斷惡業制節の御慈悲に頼りて、遂に永久幸福の妙境阿吽阿に合ひ奉らしめ給ふ御愛を、前述の如く自覺する上は、此の充分の上に尙ほも祈り求むる何ものも無く、只管御引導に順ひ奉るのみであります。仍て過去悠久に涉り、御愛に頼りて進展向上する靈界・現象界悉皆と共に、茲に謹で靈格を禮拜し、中和統齊の御道を讚美し、下記三段の誠意決心を明かにする次第であります。則ち御慈悲に頼り奉る靈界・現象界悉皆御導きに順ひて平和に進展向上し、遂に阿吽阿に合

ひ奉り、永久平和幸福を享け奉らむと努力する決心と。次に萬有個性は、箇々欲に耽り、智性を蔽ふによりて偏見我執の邪道に迷ふのでありますが、已に中和統齊の御道を自覺したる上は、今後は一切思ふこと行ふこと、中和の御道に遵ひ奉るべしと決心し。更に上の如く決心致した我等自覺の輩は、我執を斷絶して堪忍・仁愛・禮義・廉恥・自律・自助・禮讚謝生活なる人道を實踐し、智性を明かにして交互扶持し、御導きに順ひて永久幸福の妙境に合ひ奉らむと欲する決心を。三たび嚴肅に述べた

のであります。

## 皇室祖國

## 第四

天祖天照大神 を尊崇禮拜し奉る。

今上陛下 聖壽長久 皇室御繁榮を祈り奉る。謹で天壤無窮の寶

祚を奉戴し、一君億兆・和輯一家の如き御國體祖國を衛る。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

俊

右は、人道に基く日本國民道德の肝要であります。天祖を崇拜

九六  
するに依り、同時に 皇室國家に於て祭祀せらるゝ護國の神祇  
を遙に崇拜し、國恩を感謝するのであります。是れ古來相傳の  
護國精神を體認し、國民舉りて其の精神に活きる念願でありま  
す。

今上陛下 聖壽長久 皇室御繁榮を祈り奉り、寶祚の隆、天壤  
無窮を奉祝して祖國を衛るは、是れ我が日本國、子民傳統の忠  
君愛國の精神繼紹を誓つたのであります。

## 祖先考妣

## 第五

我が家御先祖累代御尊靈、考妣御尊靈を禮拜し奉る。御尊靈  
阿吽阿に合ひ奉り、永久平和幸福を享け給はむことを祈り奉る。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

俊

右は、往時を偲びつゝ、祖先考妣を禮拜し、阿吽阿に合ひ奉りて  
永久幸福にましまさんことを念願する子孫の稟性顯現にして、  
人道の大本であります。庶幾くば御導きに頼り、稟性常に明か  
に、この人道を盡さんと欲する決心を述べたのであります。

子孫 第六

南無阿吽阿 願はくは、吾が子孫末流を心身健全に、偏見我執を捨離し、中和統齊の御道を體得して清淨活動し、智性明かに、覺を成就して阿吽阿に合ひ奉り、永久平和幸福を享け奉るべく導き給へ。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

俊

子孫は、交互扶持關係の最も手近なるものであります。仍て其

の心身發育の幫助に始まり、中和統齊の御道に準由し、偏見を斷絶し、交互扶持して人道の實踐を完ふすることに至るまで、能く訓誨指導して過誤なきやう、内に求めて御引導に頼り奉らんと欲する念願の陳述であります。

體認 第七

阿吽阿

阿吽阿を絶對靈格、智・妙・覺の表章とする謂は、既に演べ



し所の如し。阿吽を禮讚謝辭と爲す意義は、本文の通りであります。

### 南無 歸命の意。

南無は申すまでもなく梵語の音譯にして、歸命のことです。儒教の傳來以來、漢土文字を日常使用すると等しく、此の類の慣用語を數箇所にも用ひてありますが、之は唯だ便宜上のことではありません。何等佛敎其のものに關係があるのではありませぬ。即ち阿吽阿に合致し奉らんとする念願であります。

### 全一

禮讚謝祈禱に當りて合掌するは、個性の交會即全一活動を象徴するのであるが、數珠を用ふるも亦、一貫する所に萬有即全一を觀じて、智・個性不二なることを象徴するためであつて、佛敎に關する所は、勿論ないのであります。

### 靈界 智性の境遇。

無臭無色、智性本來の活動境であります。乃ち現象界の外に、智性本來の活動界を觀するのであります。

境・界 個性念々の境遇。

境と言ふも、界と言ふも同じ意味であります。智性の活動過程の點々とても観るべき或點に於ける一念の境遇であります。其の或一境に滞ること久しくして個性を現することは、既に演べし所の如くであります。

禮讚謝

禮讚謝第二に於て演べました如く、御愛に感激し、歡喜溢るゝ智性の現はれでありますから、常に御引導に順ひ、苟も戻ること

無しとの決意が、自ら其の中に含まるゝのであります。

祈禱

祈禱第三に演べました通りでありますして、阿吽阿の常時向上の御引導を踰へて、尙ほ求むる所あるのではなく、向上御引導と悪業制節の御愛を自覺し、只管に御愛に頼り奉ることに意を致す心得を述べたのであります。

正直

人は内なる智性の偏見我執に蔽はるゝ所なければ、必ず御導き

のまゝに言行すべき筈であり、御導きに由る所の言行は、また必ず場合適切、自他利益すべき筈であります。五官の體驗をいつはらざることのみが正直にあらず。内なる智性の御導きに順ひ、正しく直く言行することが眞の正直にして、其れが即ち人道であります。古來人道の教は千言萬語ありますが、其の基く所は、智性の動機に由る先哲の言行を、實踐上の便宜に組織編纂したものに外ならぬのであります。此の故に、未だ曾て遺訓につきて學問修行せしことなき輩も、我執を捨つれば、智性自ら明らかなる筈で

あるから、内に求めさえすれば、場合適當の人道は知り難くないのであります。聖賢の教ありて、而して後に人道初めて出で來りたるにはあらず、人道は、人界に存在する所の中和の道であります。然しながら古來の賢哲遺訓は、人道實踐上の一定基準として甚だ便宜多きが故に、其の内容を正しく了解し、之を己に求むる業とせんことを、廣く世に奨むるものであります。

## 人道

我執偏見の蔽ふ所なき純誠智性の現はるゝ所、人界に在つて

は之を人道と謂ふ。凝つては交互扶持一般、堪忍・仁愛・禮義・廉恥・自律・自助・信友・孝・悌・忠君・愛國・祖先崇仰となるのであります。故に人誠に内に求むれば、忽ち人道を感得し得べき筈であります。聖賢の遺訓は、人道を説くこと頗る詳であります。がゆるるに、人道實踐上、之を機械的模範とせず、採つて以て己に求むる指針と爲さば、得るところ多大なりと信ずるのであります。

所謂正義なるものも、亦中和の御道でありますから、交互扶

持・圓滿和同に資すべきものたるは勿論にして、短見なる理窟に偏して、中和を妨ぐるものがあつてはならぬのであります。之は人事の大部分に關涉する觀念でありますから、慎重に考慮し、正義に藉口して人道を踏み違えてはならぬのであります。抑も我が萬世不易の御國體の精華は、君の民を視させらるゝこと赤子の如く、子民の君を仰ぎて親み、尊み、畏むこと骨肉の親に異ならず。君は億兆赤子の福祉を専ら軫念し給ひ、民意を斟酌して統御し給ひ、億兆子民は、大御心を輔翼し奉りて齊

しく御仁澤に浴する所に存するのであります。大御心専ら子民の福祉増進にあらせらるゝが故に、萬機の御統率曾て億兆の父母たるに違はせらるゝことあることなし。斯の如く萬世一系傳統の尊嚴は、如何なる民族も中途にして擬し得べきものにあらず。天孫國を肇め給ひし以來、自ら整齊の成果にして萬國に比類なく、理想をも超越する寔に金甌無缺の御國體であります。我等子民が身を忘れ、家を顧みずして赤心 皇室を擁護し奉り、祖國を衛るは、是れ智性の發露にして、人道の樞軸であります。

### 祖先奉仕

既に演べし所の如し。

### 處世

人として此の世に處するには、慎で中和の御道に遵由する外に、何ものもないのであります。中和の御道に遵由すれば、我執偏見なし。我執偏見なければ、煩悶苦惱の被制節果もなき筈であり、煩悶苦惱なければ、智妙活動の連鎖機能としての本分活動は、安樂なるべくして勞困する謂れなき筈であります。

## 清淨活動

前に屢々演べし如く、我執偏見を捨離し、歡喜禮讚謝して萬有交互扶持することが、即ち清淨活動であります。

誠心此の教を遵奉し、上記の諸項を體認し、謹で御慈悲を仰ぎ奉る。是が同行者の常時念願であります。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

俊

## 遺囑

## 第八

## 智 個性不二。

前に演べし如く、智妙活動の連鎖部分なる無臭無色の智性、其の連鎖活動中、偶々或境に留滞すること之を久しくして、其の境遇現象化したのが所謂現象界個性でありますから、個性は本來智なることは申すまでもなく、唯だ之に部分なる箇々欲が附帶して個性的に働くのであります。此の故に、箇々欲誠に部分としての必要適宜なれば、智性内に明かにして中和統齊の御道に戻ることあるべからず。中和統齊の御道に戻ることなければ我執偏見なく、

交互扶持亦圓滿和同し、それが即ち安樂幸福の妙境なのであります。然るに箇々欲必要適宜を踰へ、箇々執着する時は、智性之に蔽はれて種々境に或は留滞し、或は輪廻流轉して根本智を自覺する機會もなく、背戾被制節の渦に煩悶苦惱を繰返すのであります。苦惱を解脱し、永久幸福の妙境に到るには、唯根本智を自覺し、偏見を斷絶して御引導に順ひ、阿吽阿に合ひ奉る一途あるのみであります。

種々境に流轉する個性も、間歇的に我執なく、偏見なく、智性

允に明らかなる時、或は根本智を感じて感激感謝し、或は無意識に中和の御道に準由して安樂するのであります。中和の御道準由の善因には善果安樂件なひ、御道背戾の悪因には悪果苦惱件なふのであります。御道に遵ふものが存立し、背戾するものが畢竟絶滅すべきは申すまでもなく、御道の道たる理趣であります。故に中和の御道に戻ることの徒勞にして、唯煩悶苦惱することの外には畢竟何ものも残らざることとを先づ悟るのが、煩悶解脱最初の肝要知識であります。抑も智性が、根本智妙活動の連鎖機能とし

ての活動中、偶々個性化したる後は、間斷なく念々相續、生成延長するのであります。故に人界の眷屬は、一日過つて人外に墮ちることありとても、誠に過去を懺悔し、正しく人道を實踐すべく、誠意決心内に發起するに於ては、其の念其の儘延長して、當來は復た人界に生を享くべきでありますから、此の遭ひ難き人界に生を享けたる我等は、是非とも既に知る所の人道を堅固に遵守し、尙一段の向上正覺成就を以て終生の念願とし、萬一にも人外に墮ちざる覺悟が第一であります。

智個性不二のゆゑに、個性は箇々欲偏見の隱蔽を除去すれば、智性自ら明らかとなり、根本智を自覺し、靈界に感應出来るのであります。申す迄もなく、自覺・感應共に智性の直覺であり、五官の仲介を俟たぬは無論のことです。それゆゑに卜筮・巫術、其の他靈媒に類する事柄は、所謂妄想と觀るべきでありますから、之に惑はざる注意が肝要であります。

認識は之に異なり、個性の相對關係でありますから、相對的箇箇機能と協作用して後に、相對を認識し得るのであります。又凡



そ認識は、複雑多様の基礎上に構成せらるゝのでありますから、人たるものは、先づ心身の發育を完ふして箇々機能の缺陷を防ぎ、自己經驗の錯誤を匡正すると共に、認識一般諸科の學知のを能く應用し、以て人道の實踐を誤らざることが肝要であります。之に依つて人類は、寔に善因即ち御引導に順ひ奉り、交互扶持圓滿和同して、善果即安樂幸福を享け得るのであります。

爾等吾が子孫に望む所は、常に「阿吽阿經」の讀誦を懈らず、禮讚謝祈禱思念に止住し、以上縷々述べし所を審かに辨へ、此の

教を廣く世に傳へて、衆と共に現世安樂・永久幸福の妙境阿吽阿に合ひ奉らんこととであります。

又廣く世の同行者に望む所は、冀くは予の子孫を鞭撻して、此の教を世界に傳え布き、此の教を核心とする文化事業一般を作興し、萬有の現世安樂・永久幸福の妙境阿吽阿に合ひ奉る先達たらんこととあります。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

俊

以上を以て本講演を訖りました。洵に粗雑でありますが、何分

老年なると、生來初めての試みでありますから、不備の所も多々  
ありますけれども、此の「講演筆記」を読む人は、宜しく阿吽阿  
自第一  
至第八に對照し、其の含蓄する所の内容を能く究明せられむことを、  
切望する次第であります。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

俊

右「講演筆記」は、一應披見しました。

昭和十年四月二十日

富田俊次郎

阿吽阿教行者

## 序

次に掲ぐる「阿吽阿教行者」以下五篇は、阿吽阿會長の講話を聞く毎に、其の要領を抄録しておいたものであるが、此の度増補上梓して、阿吽阿教行者の参考に供することにした。

昭和十一年十月十日

於東京芝伊皿子

富岡清行

智性明に清淨活動する  
↓  
阿吽阿教行者  
↑  
安樂幸福の妙境

### 阿吽阿教行者

古來人類の多くは、宗教的無關心であつたか、又は傳統の形式宗教に拘泥して足れりとするか、否らざれば邪教淫祠の迷信者であつた。中には僅少なながらも眞理實在を究明して、眞の安樂を得やうと念願する者もあつた。是等の人々は、多くは靜坐冥想したやうであつたが、眞理は容易に究明出来るものではないのである。

そこで或は空想し、我は盲斷して、恰も眞理を索め得たるかの如く自信したのもあつたが、元來空想盲斷に過ぎざるものは、後日

(一)

(二)

に至り難解問題に遭遇すれば、忽ち窮するは當然である。

然るに今や幸に阿吽阿教が世に出でたるに依り、何人たりとも此の教に準由し、自分勝手に偏りたる思ひを起さず、己を忘れて自然と同化したるかの如く二九頁支機の熟するに至れば、左の通り覺り得ることゝなつた。

智 無窮に彌り自由活動する唯一御存在。

自由は絶対御存在の御特性、御活動の所以に御存在す。

智 時空を様とする御存在。

活動は時間を充實す。時間を充實することは存在、空間は活動の様式。

智 有無を超越する御存在。

時間は無始無終、空間は無邊無涯、無始無終・無邊無涯は畢竟無。

智 御自愛御自處の妙動に因りて部分界一切萬有化成し、種々相現象し、種々境發展す。乃ち部分界萬有は、因果の御則に順ひて化易・推移し、御慈悲と崇め奉る愛の御引導に隨ひて進展・向上する所の根本智妙動の連鎖なり。故に萬有は、此の中和統

齊の御道御愛と御因果則の妙に因りて推移・進展・向上して、遂に根本智に契合完全す。

智。個性不二。部分界の箇々は、極微も其の構成も悉皆智性即ち智。是を以て箇々は必然活動す。箇々は箇々に必要の箇々欲、箇箇機能を稟有す。箇々欲、箇々機能を賦けたる箇々は、智性たると與に個性。

箇々欲允に中和を得て智性明らかなる個性は、即ち全一の部分的顯現。

智性は根本智を自覺し、靈界に感應し、箇々機能と協作用して對象を認識す。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

俊拜記

(三)

斯の覺りは、大我の宇宙が小我の己に映りし如く觀ゆるが故に、之を兩鏡相照すと云つても形容としては差支ないが、實は宇宙と己とは二つのものでなく、宇宙が己で、己が宇宙なのである。宇宙は廣大無邊無限智にして、其の尊きことは言語で言ひ表はし得るものではないのであるから、これを阿吽阿と稱へ奉るのである。一三頁 參照又假

に智又は根本智とも稱へるのである。四、五、二  
七頁参照

根本智の己に在るを智性と云ふ。之も前と同じく、根本智と智性とを二つに観るのではないが、客觀的に根本智と言ひ、主觀的に智性と言ふたのである。

## (四)

こゝに於て自己の尊嚴を明かに悟り得た我等阿吽阿教行者は、自己尊嚴を瀆すことあつてはならぬ。

上の如く覺りしを、客觀的には根本智を自覺したとも言ひ、又主觀的には智性が明かになつたとも言ふのである。

## (五)

箇々慾の遮蔽消散して、智性寔に明かなれば、萬有個性の始・中・終關係も、人道も必然明かになつたわけである。

根本智無始妙活動ゆゑに、連鎖活動する智性偶々萬境該總阿吽阿の或境に滯りて、萬境具有智性の相應境に響應して之を旺盛發達せしめ、其の境遇の現象化したのが、萬有個性の始めである。七〇、七一頁参照此の因縁に依つて現象したる萬有は、爾後箇々慾念々相續して輪廻流轉し、種々境に執着するのであるが、阿吽阿の御愛は、常に萬有を導きて向上發展せしめ、息むことないのである。

然るに箇々慾之に背馳して箇々境に執着するが爲に、個性は頻りに御導きに背戻するのである。背戻とは、箇々慾が智性に剋つことである。箇々慾の背戻故に起る智性の惱と、箇々機能の受ける被制節苦患とが刺戟となつて、個性は其の都度反正向上するのである。此の向上・背戻・被制節そのものが、安樂・懊惱・苦患なのである。斯の如く悠久の昔より循環運動を繰返す間に、阿吽阿御愛の常時向上御引導と、不斷の背戻行爲制節の御恵みに依つて、個性は漸々我執偏見を捨離して進展向上し、遂に中和の御道、至善中正に止り、

現世終り其の儘延長して、永久幸福の妙境全一阿吽阿に契合完全するのである。四三、乃至四五、七  
〇乃至八四頁参照

前記の通り、豁然正覺して阿吽阿御愛の有難さ勿體なさに感激し、眞に宗教生活に入り、常に禮讚謝して清淨活動するのが、阿吽阿教行者の祈禱である。二一、一一  
六頁参照

根本智妙活動ゆゑに、連鎖活動する無臭無色の智性、偶々前記因縁に依つて個性と現象してよりこのかた、萬有は次へくと交る交る縦貫發展して即今に至り、八方無邊涯に彌りて、互ひくくに聯絡

(六)



して扶け合ひ持<sup>ま</sup>へ合つて、此の現象界が保持せられて居るのである。是れ智性の連鎖活動に統一あるがゆゑである。即ち之が全一活動本性にして、哲學的に統一原理と稱するものも亦是である。

萬有に此の本性存するに因つて天地位し、萬物育し、人間界にあつては交互扶持・人道一般の主體として、社會の安寧秩序を維持するのである。自一五至二  
一頁参照

全一活動本性、即ち智性が人道の主體ではあるが、人道の實踐は、正しき認識を待つて後に行はれるのである。其の所以は、智性は根

(七)

本智を自覺し、靈界に感應はすれども、相對關係對象なる箇々は、箇々機能と協作用して始めて之を認識し得るのであるがゆゑに、人道の實踐には、智性箇々機能<sup>耳、目、鼻、舌、身の類</sup>協作して、一切の思案行爲に隨時隨機の正しき對象認識を必要とし、之に加ふるに認識一般<sup>學術</sup>を能ふ限り場合適當に參考應用して、自律自助・交互扶持、人道の實踐上に錯誤なきを期することが肝要である。五、三五乃至三七、一  
一五、一一六頁参照

個性は、智性と箇々の合同なるがゆゑに、箇々機能の働に待たざれば理會し能はぬか、又はそれに依つて理會を一層明白ならしむる

ことが多くある。其の一例として主観のものを自己の口で發音し、自己の耳で聞き、客觀的に認識して満足する如きがそれである。之に類することは日常數々見聞する所であつて、殊に迷信的宗教に多いやうである。

「主観的のものを客觀的に假設して認識するは可なるも、永續して客觀するは迷想迷信なり」

右會長の一家語を玩味すれば、迷信に陥る憂少しと思ふ。

智性は、根本智と不二であつて無始無終のものであるが、前に述

べた因縁に依つて個性と現象してよりこのかた、箇々欲偏見ゆるるに種々境に輪廻流轉して寄る所は屢々易ると雖も、其の爲に永久存生を中斷することはないのである。

假の姿の生老病死は、生命の本性永久存生に少しも與る所なきものと知るべし。是れ達人の生死に懸念することの淺き所以である。

三四頁  
参照

箇々欲、智性に剋てば、主観的には智性の惱となり、客観的には阿吽阿の御導きに背くのである。個性箇々慾に引きづられて阿吽阿

の御導きに背き、種々境に流轉するは、無期限に懊惱を繰返すことであつて、之に過ぎたる悲惨事あらんや。此の如く懊惱を繰返して、嘗て永久幸福の妙境阿吽阿に合ひ奉る期を知らず、生々世々懊み惱むことは、唯だ箇々欲に迷ひて偏見我執するがゆるぎである。

唯だ慎で御導きに順ひ奉りて正覺を成就し、阿吽阿の妙境に合ひ奉ることに依つてのみ懊惱を解脱し、永久に安樂幸福を享け得るのである。此の事實を悟ることが、人生の一大歡喜である。

阿吽阿の無條件御慈悲は、萬有を常時向上進展せしめ給ふが故に、

(ハ)

個性の無意識中にも、至善中正・圓滿和同の妙境に到達せしめ給ふことあるべしと雖も、其れは未だ正覺成就し、衷心感激して阿吽阿に歸命したのではないのであるから、恰も齒止めせざる車輪の逆轉し易きが如く、亦復た箇々欲再發して輪廻流轉を更に繰返すことが屢々起るのである。然るに根本智を自覺し、御愛御慈悲の有り難さ勿體なさに衷心感激して、智性誠に明かに、一切思案行爲自ら中和統齊の御道に叶ひ、阿吽阿に歸命する所の阿吽阿教行者に限り、必定永久幸福の妙境全一阿吽阿に契合完全するのである。三二、三三、三八、四、一、六頁参照

假の姿の生老死は、自然の運命である。然れども誤謬認識に原因し、衛生上衣食住の調節を愆つて天壽を短折せざる注意が肝要である。五二頁 参照

箇々の疾病は、箇々機能の傷害であつて、人道の實踐上認識の誤謬に原因するか、又は無意識或は意識して其れに戻ることに因る場合が多いのである。認識愈あやまる所なくして衣食住の調節宜しきに適かなへば、箇々機能は完全に發達し、機能の不虞傷害も起らず、天災地變の類も豫め知り得ること多ければ、此の種の災難も亦少き筈である。

然るに猶ほ疾病遺傳に罹るときは、病に應じて醫療を盡し、被制節苦患たる傷害治癒すべきである。之に加ふるに、只管阿吽阿の御愛に頼り、専心平癒を念ずれば、治癒を促進すること疑あるべからず。一五頁 参照

**期待** 智性常に明かに、御導きに順ひて良心に従ふと云ふに大差なし **思案行** 爲すれば、懊惱することあるべからず。認識に誤謬なく、自律自助宜しきに適かなへば、人は無病息災なるべき筈である。心に悩みなく、身に病なきを安樂とぞ申すべけれ、それが阿吽阿教行者の期待する境地である。

受動的暴力とか、自己の住せる地域に依存する原因より起る災害國難、地變、天災に因る災害の類に就いては、自己認識で豫知すること能はざるか、豫知し乍らも、共同生活上の理由で忍んで殉難する場合は、一身・一個の認識問題にあらずと知るべし。その原因は、一身・一個以上の所にあるのである。

人類が、悠久往古の單細胞體より今日に至れる推移・進展の無數段階は、阿吽阿の御導きに依る個性の向上進展等級であると同時に、箇々慾背戾罪惡の累積層である。斯の如き累積惡業を現世に至つて

解消する手段は、事實上あるべき筈なく、又之を贖ふ方法もあるべき筈はないのである。

阿吽阿は、一切の過去惡業を赦し給ふて、常に向上々と導き給ふのである。是の故に我等人類は、唯だ過去の惡業を反省懺悔して、偏見我執を斷然捨離し、感謝して御導きに順ひ奉り、爾後懊惱苦患を免れて、平和に享樂する一途あるのみである。二七頁 参照

絶對靈たるものが、過去に溯りて人類の犯せし罪惡を懲罰すると見るのは、人間の淺智惠である。阿吽阿は無限愛であらせられ、萬

有を些しも早く永久幸福の妙境に入らしめんとの思召しである。無條件で愛し給へばこそ悪業の團塊萬有が、次第に今の程度まで進展して來たのである。然るに既成宗教信者中には、過去の悪業を後悔して自責止み難く、赦免を禱りて極度に禁慾生活したり、山野で難行苦行したり、又は一人の獻身犠牲に依りて、人類の罪惡は贖はれたりとの傳説に信賴感謝して、其の恩に感激のあまり、己も慘憺たる犠牲的生活に甘んずるものが少くないのである。寔に見るにも聞くにも忍びざる氣の毒至極の迷信者が多くあるから、我等阿吽阿教

行者は、阿吽阿の前記無限愛の福音を廣く世間に傳へ、先づ是等隠れたる精神的萎靡悲慘の同胞を救ひ、其の生活に光明と慰安を與へねばならぬ。

**躬行** 我等は阿吽阿の無限愛に則り、他を憎まず他を怨まず、有情を愛し非情を護り、數々「阿吽阿經」を讀誦し、常に心に禮讚謝しつゝ、清淨活動し、中和の御道の廣く世間に傳はり、郷邑祖國はもとより、遍く全世界に及びて、全人類が平和と幸福を享樂し、未來に延長して永久幸福の妙

境全一阿吽阿に契合完全すること、ひたすら一向念願するのであります。

一四四

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

俊

昭和十年十一月三日

## 阿吽阿行者に就いて

一「そこで或は空想し或は盲断して云々」項につき

一二三  
頁参照

経験智識の缺けたる対象想像が空想であり、智性思辨の伴はざる機能だけの断定が盲断である。

變態心理・潜在意識・狂人心理其の他夢類の雑多は、いづれも認識に必要なる智性と、箇々機能の協作が缺けてゐるのである。

潜在意識や、或機能の特殊に發達せる類似狂の言行中には、常識者の屢々驚異するものがあると云はれてゐるが、それが又迷信の誘

因となつてゐることも多くある。これ等は畢竟單なる驚異に止つて、何等深き意義のあるものではない。精神上のことは、明かに其の由つて來る所を辨へ知るに非ざれば、迷信に陥る虞おそれが多分にある。是れ全一活動本性の外に眞理なしと覺悟することの肝要なる所以である。  
三五、三六頁参照

二「然るに今や幸に阿吽阿教が世に出てたるに依り云々」項につき

一二四頁参照

自分勝手に偏りたる思を起さず、己を忘れて自然と同化したるかの如く、玄機熟して阿吽阿を覺り得ることは、全く各自の努力に依

ることであるから、設たひ幾年月に亘るとも、油斷なく此の大事を大悟徹底する迄努力すべきである。

但し阿吽阿の御愛御慈悲は、少しく注意する者は、人生に即して常に實感する所であるが故に、未だ徹底的に大悟せざる者も、此の實感に即し、尙ほ聖典『阿吽阿經』を讀誦して、はつきりと御愛を覺り、謹で禮讚謝生活すれば、必ず常に安樂平和である。現世安樂平和なる者は、又必ず其のまゝ、未來の安樂平和境へ遷るのである。嗟あは禮讚謝生活なるかな、禮讚謝生活なるかな。



三 「斯の覺りは大我の宇宙が小我の己に映りし如く觀ゆるがゆゑに云々」項に

つき  
頁参照 一二七

此に言ふ所の宇宙が己で、己が宇宙であると言ふのは、自分勝手に偏りたる思を起さず、自然と同化したるかの如く、偏見我執の雲散りて、無臭無色の晴天境地に在る者の謂である。未だ偏見我執を捨離し得ざる部分的境遇にある者にあらざることには言を俟たず。

四 「こと」に於て自己の尊嚴を明かに悟り得た云々」項につき  
頁参照 一二八

阿吽阿教は、萬人齊しく阿吽阿を覺り得ると主張するのである。

否寧ろ萬有は、本來覺者であるが、一時の箇々偏見我執の雲に蔽はれて、智性が隠れてゐるのだと云ふのである。偏見我執を捨離すれば、本來の智性明かになり、其の自由活動するのが即ち全一活動本性それ自體である。このゆゑに覺者は、尊嚴なりと言ふのである。

五 「根本智無始妙活動ゆゑに連鎖活動する智性云々」項につき  
頁参照 一二九

萬境該總阿吽阿の或境が、萬境具有智性の相應境に響應し、其の境特に旺盛發達して、現象化したのが個性の始であるといふ文意を誤解し、阿吽阿の該總境中には、好ましからざる境地  
既成宗教の所謂魔境の類が存

在するかの疑惑を懐くものもあり得ること、思ふが、阿吽阿の徹頭徹尾愛であることは、繰返し述べし所である。智性が連鎖活動中、或境に執着して邪まに發達至極する所の一例として、個性輪廻流轉の主なる因縁である生成性について言はんには、全一活動ゆゑに、自體内に部分的働を生成する阿吽阿の生成性體にが、偶ま連鎖活動中の智性の萬境該總阿吽阿の或境に滞るに當りて、其の境、智性具有の相應境に響應して、其の境を特に旺盛發達せしむる縁となり、其の發達至極する所、亂淫畜生境を現じたとしても、それは一境に停滯

したる智性偏執の結果にして、阿吽阿は依然無瑕玲瓏・圓滿具足神聖である。此の一例によつて個性の種々境に流轉する因果條理は、悉皆個性の偏執に原因することを、略ぼ理解し得た筈だと思ふ。此に於て魔境なるものは、個性作爲の第二次的境地なることを知るのである。

六 「根本智妙活動ゆゑに連鎖活動する無臭無色の智性云々」項につき 一三一頁参照

根本智妙活動と、全一活動本性と、明らかなる智性の自由活動とは、三位一體である。阿吽阿の位を三様に言ひ表はしたのである。

七 「個性は智性と箇々の合同なるがゆゑに云々」項につき 一三三頁参照

靈界感應は、智性の専らする所であるが、現象界箇々の相對關係は、智性箇々機能協作用して始めて之を認識し得るのである。此を以て個性は、認識範疇をとほすことに依りて對象關係を詳かに會得し、智性箇々相共に満足する次第である。

八 「阿吽阿の無條件御慈悲は萬有を常時向上せしめ給ひて云々」項につき 一三六頁参照

阿吽阿の無限愛は、常に萬有を導き向上せしめ給ふがゆゑに、萬有は意識すると意識せざるとの區別なく、一列に一刻も息むことな

く向上進展して、終には至善中正に止り、交互扶持亦圓滿和同するに到るのである。萬有が此の全一に向上進展する事實は、宇内萬物の進化に徴して明かである。此の無限愛を教ふる阿吽阿教と、衆生救済を信仰に條件づける既成宗教との相違は、異教者雙方の等しく検討すべき重要問題であらう。 七七頁参照

九 「假の姿の生老死は自然の運命である云々」項につき 一三七頁参照

現象界箇々假の姿は、新陳代謝する無常のものであるから、生れ來つたものは、何時かは必ず死し去る悲哀に行き當るのである。箇

箇の死亡は、寔に悲しき出来事ではあるが、自他共に人道を竭してなほ救ひ能はざる上は、無常必然の成りゆきとして諦める外はないのである。永久生命に何のかはりもないのであるから、我等は常に人道を實踐し、慎で御導きに順ひ奉り、永久幸福の妙境全一阿吽阿に合ひ奉ることを楽しんで待つべきである。

一〇 「然るに猶ほ疾病に罹るときは云々」項につき

一三八  
頁参照

疾病にかゝりたる時は、先づ疾に應じて醫療をつくすと同時に、阿吽阿の御愛に頼り、自己念力を以て治癒すべしと言ふのである。

其の所以は、萬有は阿吽阿の常時向上の御愛に頼り、主觀的には個性の念力により、斷へず向上進展して現在の洵に有り難き人界まで進展したのである。斯の如く向上進展する念々の力は、自己機能の傷害に際會しては、當然治癒的に活動するのである。是れ個々の稟性であり、又我等の現識する事實である。疾病は、箇々機能の傷害であるがゆゑに、傷害事實を認識して阿吽阿の御愛に頼り、其の治癒に専念すれば、機能を刺戟して治癒活動を促進するは當然のことである。